

より産業の経済成長に対する重要度を力説するのは、たとえ御座産業  
の河名は著せられても、ひとり農學関係者の独断であらうか。経済成長  
の中に確たる基礎を築き、その占有範囲の拡大を積極的に行方づけるた  
め、人材への期待をこめた農學教育をしなければならぬ。大学の使命は  
重い。大学は研究、教育および社会奉仕という三つの使命を持っている。  
「これらの使命を両面から支えるものは知識の獲得、伝達および応用であ  
る。すなわち知識の獲得という問題は、研究調査の使命運行となつてあ  
らわれ、知識の伝達は授業すなわち教育の使命運行という形をとる。そ  
して知識の応用は、大学の社会奉仕と同一視される。」大学農場は大学  
同様の三つの使命を有することは勿論、農學教育の場として、農學部系  
の中では、農學部の推進力に対する即座の場としての重要性を帯  
びている。と宣言するのは、より明確な認識としてのみである。農  
學技術や農學の進歩が農學部において奨励に適用されるテンポを速めて  
いる。大学農場は、このことを踏まえて、総合的に研究、教育とパランス  
のとれた管理運営がなされ、日本農業の発展に寄与するべきである。  
経営をする義務を有する。このような農場経営が研究を促し、研究して  
ないことは、たんに経営者からみれば、教育の使命運行という形に  
知識の伝達に於けるその教育内容の質を低下せしめる危険をも含んで  
しまふという懸念から明白であらう。このような研究こそが大学農場の  
歴史を維持する原動力の研究であり、従来の研究における研究とは異  
なるといふ論議である。このように農場から農場管理、管理農學など  
が新しく想起され、農場と結びつき、農學部系として農學部系、作農技  
術学および農場生産学等の三つの部門の抽出となつていく。これに「大  
学農場は農場経営の研究をもち、合理的な農場経営を営むこと、(現代化  
され)近代化された農場で、学生の教育すなわち農場実習を行ない、な  
お農場の一部を教室の裏面に提供して、それを観察すること」を目的と  
して、このことが認識されるであらう。このようにあり得る大学農場の概  
をとらえ、これと併せて、大学農場の発展における研究、教育の現況と  
を比較し、「大学農場」の発展の骨子のみを以下に示す。

研究の現況からいへば、この場合研究とは既に規定したように  
農場独自のものであることはいまでもない。本学農場における研究ス  
タッフは、各農場に配置されているわれわれ農藝師である。そして、  
本来農場独自の研究をしなければならぬわれわれは、農場研究を  
東され、研究における研究と同様の内容をもつものを、限られた施設  
の中で探求している現状である。研究運用による農場の両研究を進行  
しなければならぬという認識も、しかも種々の制約を受けている中で、  
常にわれわれは研究の生産性についても考慮して来た。このように集中  
的に進行出来るような制度でないため、農場独自の研究が断片的でな  
い、自慢にはないが、進歩的である。いまより農場研究のできない  
い決定的理由は、スタッフが少なく、その不協和なものであることであ  
る。全員自然農學系、しかもたまたま構成員から成つていくことである。  
八〇が病弱農藝師(農藝師)。このことは前述のごとく、われわれの本  
来の研究が高度なものであるため、社会農學系のスタッフの  
必要性から容易に理解されるであらう。

教育の現況を向けてみる。既に研究の現況のところでも述べた  
ように、その不足にない特異な状況といふことが判明した以上、正  
常な知識の伝達、すなわち教育の使命をまっとう出来ないことは論を待  
たないであらう。また農場を構成する知識をもつ教授が農藝師教育を担  
うのが原則である。しかるに本学農場においては知識のごとく、他の専  
門分野の教授が、その資格関係の文憑下に見出し、実施している。農場  
実習指導の責任者として進出された、現職した農藝師が、これを  
専門とし、義務をまっとうして貰いたいものである。更に従来の相違に  
よる実習内容は、同じ学生が二年かけて同じ作業をこなすならば、  
より時間的すべからず、それのみによつて内容の相違を、何ら学問  
的根拠による分類ではない。時間的相違を欠き、単に機械的に行  
なつていくに過ぎず、しかもそれにならば、公平を欠き、土地におけ  
る問題を主とし、実習の方は従としてしかならぬといふ姿勢は、まさ  
に農場実習指導の何ものでもない。このように現在農學部には、真に

農場実習教育を担当出来る資格者が唯一人も居ないことを明言する。  
このように大学農場、研究、教育の場として有名無実化している場  
において、教育をしてきたという教授会の自負の中に、まさに詐欺師の  
それを容れ出来る。好むと好まざるにかかわらず、残念ながらわれわれ  
もこのような状況の最悪化の感に、積極的に一頁を担つてきたこと  
を告白し、深く謝罪しなければならぬ。このように置かれてきたこと  
を容れした原因は何かと言へば、農學部教授会の農學に対する理念の欠如、  
大学農場に対する誤った認識以外の何物でもない。このことは研究に對  
する無自覚、無理解、そして歴史的に農場実習(教育)に對する試行錯  
誤等にもつくべき無責任の賜物である。以上が農場からみた教授会の  
弊害(内部)の一部分であり、この根深い悪しき原点の一端と、  
まさにならわれの運動の目的である。紛争解決の打開をめざして  
われわれが種々の提案を試みてきたにもかかわらず、これらの多くの問題  
の発生を恐れ、隠微するためにきた教授会の態度は、積極性を顯  
して下さぬ、という厚い鉄のカーテンを引き、閉鎖的になるばかりで、  
その体制のあがきを示すばかりである。そしてこれに遠くをかける、  
政治問題についても大学のキャンパスを使って話し合ひしようよと、一〇  
月九日に協議隊を導き入し、強圧を加えてきた。われわれはこの欺瞞を敢  
然と受け立つものである。

### 学園叛乱と自己のかかり

#### レポート(A)

私は戦中派で、今から考えると貴重な青春時代を、帝國主義、軍閥主  
義の渦中で過ごし、戦争の最前線を数年に亘り経験し、戦争のむなしさと  
人間の哀れさを知った。人種こそ異なり人間が人間を愛す、このような罪  
悪が、思想の根柢から、権力の衝突から、特定の権力の経済的欲求と支  
配者意識によつて戦争が行なわれて良いものであらうか。学園は戦争の  
ためにとか、特定権力者の利益のためにとか、特定の階級のためにあるの  
ではなく、あくまでも人類の人間の福祉に貢献するために存在するもの  
である。この学園に、研究に自由がななく、なかならうとしている。  
私は過去において、自由といふものには嫌悪をもたない。自由思想は即  
社会思想、或は「赤」といふレッテルを貼られ、当時の社会からは殺人  
罪以上の罪名を「面談、死囚級」といわれ、社会の枠外に生活を余儀な  
くされた。このような教育訓練によつて、私は戦後の民主主義というも  
のについて、思想問題についても深く思考することなく現在にいたつ  
ている。ただ大学における学園研究の自由といふものについては、思想、  
或は特定の権力(國家、産學協同)が介入すべきでないし、介入された  
状況下で行なわれる学園研究には真理の探究はあり得ないし、どだい真  
の学園とは反権力的要求を含んでいると考へて。  
昭和四〇年頃から開始した、インテリゲンシア反動闘争、第一次野田事件  
(S四二・一〇・八)以来、日まじり激動する学園を中心とした、青年、  
学生の権力に對する闘いを知り、見るにおよんで私なりに、この問題の  
根柢、提起者たるこの学生の思考の発端が如何なるのか、自分の  
周囲のものと結合し、議論し合つてきたが、自分自身の闘いで受け止める  
ことはできなかった。昨年の一〇月二一日第三回闘争反動デモにも新風  
にだけ、その時は局外者として、最終電車まで、自分の目で見、足で





なぞで起っている。その中で論議はとらてもよい。環状論議しか討論の  
場柄で、旧来の事務方、シ、的傾向が徐々に顔を出しはじめて、  
これらの台頭は相互批判の同業者組合的教授会の責任であり、また  
す進歩していかねばならない。この闘争にかかわって来て、今云  
ふことは、迷わず前進する以外にないことであり、しかも、この言  
論をめぐって英訳的でない限り、ということのみである。

レポート(D)

戦後を契機に日本の大学は、平和と民主主義を唯一の旗印に掲げなが  
ら、戦争の犯罪的責任を捉えて深い反省と自己批判の作業  
をなし得ないままに教壇に立ってしまった。幾多の尊い学生をアジア人  
権闘争への戦場へ送りだした。たのは教授陣ではなかったが、戦争責  
任の追求は、単に東京裁判だけの表面的処理だけで終らせてはならな  
かった。教育勅諭そのものが深く奇詭に追求され、痛烈に人間闘争の内  
部まで浸透させることが必要であった。戦争の罪状を数行して済ませ  
先生が、一夜明けた終戦の日から何の悔いもなく教壇に立ってしまった  
戦後現在の学園闘争の源流があったのである。

戦後二四年、漸く議会制民主主義が人民の幸福に無様な存在であった  
ことが教育者学生の手によって大衆に向けて知らしめられたのである。平  
和と民主主義が如何に欺瞞に満ちたものであったか、問われよう。平  
和論の論理が貫徹された平和と民主主義も、骨髄化しない訳には  
いかないし、空洞化しない訳にはいかないのである。平和主義を貫徹  
しようとするならば、朝鮮戦争・ベトナム戦争への軍事協力、経済協力  
を拒否しなくてはならなかった。アジアの緊張緩和の為に主体的に関  
ることがなされなくてはならなかった。

帝国内閣制民主主義が人民の幸福に無様な存在であった  
ことが教育者学生の手によって大衆に向けて知らしめられたのである。平  
和と民主主義が如何に欺瞞に満ちたものであったか、問われよう。平  
和論の論理が貫徹された平和と民主主義も、骨髄化しない訳には  
いかないし、空洞化しない訳にはいかないのである。平和主義を貫徹  
しようとするならば、朝鮮戦争・ベトナム戦争への軍事協力、経済協力  
を拒否しなくてはならなかった。アジアの緊張緩和の為に主体的に関  
ることがなされなくてはならなかった。

帝国内閣制民主主義が人民の幸福に無様な存在であった  
ことが教育者学生の手によって大衆に向けて知らしめられたのである。平  
和と民主主義が如何に欺瞞に満ちたものであったか、問われよう。平  
和論の論理が貫徹された平和と民主主義も、骨髄化しない訳には  
いかないし、空洞化しない訳にはいかないのである。平和主義を貫徹  
しようとするならば、朝鮮戦争・ベトナム戦争への軍事協力、経済協力  
を拒否しなくてはならなかった。アジアの緊張緩和の為に主体的に関  
ることがなされなくてはならなかった。

帝国内閣制民主主義が人民の幸福に無様な存在であった  
ことが教育者学生の手によって大衆に向けて知らしめられたのである。平  
和と民主主義が如何に欺瞞に満ちたものであったか、問われよう。平  
和論の論理が貫徹された平和と民主主義も、骨髄化しない訳には  
いかないし、空洞化しない訳にはいかないのである。平和主義を貫徹  
しようとするならば、朝鮮戦争・ベトナム戦争への軍事協力、経済協力  
を拒否しなくてはならなかった。アジアの緊張緩和の為に主体的に関  
ることがなされなくてはならなかった。

非常に政治的だから、理由で無関心、無定見であるならば、まさに大  
学は、大衆社会における指導を放棄し、体制維持の末権階級に情し  
てしまふのである。

大学は常に社会発展の先導に立たなくてはならない。例えそれが苦難  
に満ち、政治的圧迫を受けようとも、真理の探求は単なる抽象ではな  
い、具体的実践を通して、全人民に与えていかなくてはならない。  
全共闘運動の一部暴力学生と規定することは簡単だ。表面的・現象的  
には、機動隊導入によって、学園から追放することも不可能ではないで  
あろう。然し全共闘の志向した人民性を払拭し去ることは権力ではな  
ないし、人民大衆に深く動かし浸透した全共闘の思想を敗退することは  
不可能だろう。その思想は、反戦青年委員会の労働者、農民を捉え、益  
々その輪を拡大してゆくであろう。

大学闘争のつぎつぎの問題は、深々根源的である。体制に浸透しつ  
て、日常に押し流されていってしまった過去は清算しなくてはならない。  
大学は何を、深く問いつめることなく、下層教育労働者として、管理職  
を敵視し、学生に煽動してきたその罪状は否定しなくてはなら  
ない。専ら資本の論理に買収された教育そのものを告発し、人民闘争  
団を創らざるを得なかった。た機構そのものに批判の眼を向けなければ  
ない。産学協同・産学協同・官学協同を当然の論理として受けとめ、何  
の疑いすら抱かずに独占権に奉仕してきた自己は、その反人民性故に  
否定されなくてはならないのだ。再び、帝国主義の大学支配を許し、学  
生を権力に死に投じ、戦場へ送りだしてはならない。そしてアジア人民  
の苦難の悲哀を再び踏踏してはならないのだ。

大学は一部特権階級の独占物ではない。人民大衆に敵対する存在であ  
ってはならない。人民を解放し、人民の幸福に奉仕するものでなければ  
ならない。学問・研究は、人民が生み出したものである。大学を支えて  
いるのは、働けられながら然るが働いて、労働者、農民であつて、  
文部省でも独占の寄附でも絶対にない。まさに、根底的に体制維持力、  
占資本を支えているものこそ、はかならぬ労働者、農民なのである。労  
働者、農民からの収奪と搾取が彼等を支えている財源なのである。とす  
るならば、学問・研究の成果は国民、労働者、農民に還元すべきものな  
のである。

複雑な現在の社会機構は、それをうまくカムフラージュしながら、この  
からくりを大衆に解らせないようにする為の機制にすぎない。その機構  
そのものを、全共闘運動は人民の前に大衆的に明瞭に暴露した。故に、  
直接国家権力そのものを引きずり出したのである。それは人民に敵対す  
る権力として明らかに対峙させたのである。

人生は有限である。権力の権威に屈し、その忠実な僕として、人民  
大衆に敵対する道を歩むのか、又動く人民大衆の先兵として、人民解放  
の為に新しい大学を創造しようとするのか、全学生、教職員にいま、ま  
さにこの二者択一を全共闘運動は迫っているのだ。

レポート(E)

大学の使命である研究・教育活動を通じて自己を鍛練磨練し、不十分  
ながら教職と云う位置から社会に奉仕するため、私は大学に残ったのだ  
である。しかしながら、私の意に反し、人類の幸福のために真理を探究し、  
現社会に存在する、また将来発生するであろう諸矛盾、病いの隠れた原  
因を徹底的に追求し、それを根本的に治す方法を模索し、導き出す機能  
体制が完全に麻痺し不能になっているのが大学である。と同時に個から  
発生・発散し、全体(社会)が構成される原則を逆に全体(例えは政治  
大学)を優先せしめながら各々が従属すると云うような主客転倒した  
思想が人間形成の場として自負する大学人間に語られるのが現状で  
ある。

研究として自己を本格的に燃焼し、將來にわたってそれを燃焼させるか否かと云ふことが重要な動機となつたのである。これらの事情は、既に苦痛に満ちた道であるが、その反面現在から將來に向つて生きることに実感を感じてゐると思ふ。

今まで私がいふことは、体制内に無批判的に埋没し、順応して来たこと、全て対象物を正しく認識し、積極的に取組んでいこうとする意欲の不足である。こう云ふ姿勢から日常的に自己を怠惰に説き、無節制に研究・教育体制に依り込み、やり過ぎて来たのである。この罪に大学当局、連合教授会発行の教育白書の研究体制の問題点で「現在明治大学において、たとえ有効な研究条件が整備されても、研究する余力が教員からかなりの程度奪つてしまつてゐることは明白であり、逆に研究力を入れることが教育活動の停滞を生みだすことはすでに経験的事実である」と公に指摘されるのである。

大学体制の内表を認識する内からわづかながら本来の自己を取り戻し、体制内の矛盾を捉へ、批判しながら、それを理論的に解明し、止揚する努力を怠らなかつたのは、人間・個の弱さの爲で、臨戦と実践との間に大きい隙間を家畜的に設けていたのである。

六・二一のバリケード以後、自己存在の認識を喚起すれば自覚した研究者としての認識、自己の大学における関係、大学と社会との関連性等について、今までの全ての業務から自らを解放して深く問い直し、思考する中からそれの突破に導き出したのである。

出発点として、私たち工学部実験助手が明治大学において自己の存在を明確にするため「人間宣言」と云う形で表明し、大学の本質的問題を提起し、本格的に解決する過程として教授会との話し合い、教員の討論会を敢て行つた。またたゞと共に闘う仲間を増やそうと努力した。しかしながら、大学当局や教授会の対応の仕方は、自分における本質的な問題を何ら解決しようとする態度や行動を示さず、たゞ形式的な箱本の問題のみを取り上げ、真摯な運動を志向する学生諸君を逆に弾圧しようとするのである。

その後一〇月に入り、学校当局は一〇、四全学生集会を招いた。全学生の前で所信を表明する予定を全共闘の学生諸君がたゞ抗議を占拠したと云う見逃げられた理由によって、急遽その集会を中止した。また国家権力の要請のもと一〇、九大学内に官憲を導入し、学園を遊弄されて、全学生・教職員を学外に締め出し、学園の機能を完全に喪失せしめ、極動員の要請のもとにのみ管理される云々は機動隊の侵入を要請し、大学の存在を益々疎視させ、バリケード時以上の混乱・激化状況を醸成し、自家以外に進む道はないのであらうか。

このような情勢から、現在の大学秩序の解体、教授陣の権威喪失の要求、評議会発足の部外生の強制学園闘争を原動力として、我々自主的行動が目標としている教育体系の再編成に対する局面たる結果として、私たちの運動を遂行せねばならない。その運動の方法としてはまず過去の自己の存在を再評価する作業から始まり、教授陣を信頼し、研究者として「何を」「どう」いう目的で「研究」するのか、「その研究が社会全体においていかなる意義を持つべきか」と云う研究の本質的な要素を常に念頭に置きながら、研究・教育活動に従事しなければならぬ。と同時に従来の秩序に際し一切の染指は放棄して、私たち自身の質の向上を自覚し、相乗効果を得るであろう種々な活動等に対し断固として抵抗をねばならない。以上のような覚悟した内に身を処し、耐え忍んでいくことが自己の存在であり、このことによつてのみ新しい未来が開けるのであるし、このことが歴史を動かすことを意味するし、自らを実現せしめることなのである。

三年前に私は、個別別大の改革を公にして、全園紛争を契機に解決する問題点を指摘し、九六、三二五、学園正義（グループ）しかし、その結果はご覧の通りである。何一つ本格的に解決されたものがないのが現状である。ここに改めて、既提出の問題点を反復しよう。この問題点は学生から提起された問題と自らのものとして、大学当局へ公開質問の形で提出したものである。

1. 国家社会と私学の関係
- ロ、財政的側面
- ハ、私学の建学の精神の内実は何か

2. 学校の組織機構とその運営について
- イ、理事会・評議会、教授会、連合教授会、専任教員連合会・学長・部長の責任と権限を明確にせよ。
- ロ、体育審議会の制度について
- ハ、校友会と学校運営について
- ニ、大学当局は自らの公報機関（大学新聞とは別）を持つ必要がある。

3. 教育問題について
- イ、大学における教育は多人数教育を可とするか少人数教育を可とするか。
- ロ、現行の学生数は、本学において大学教育を遂行するに当り妥当なものと考えらるか。
- ハ、募集定員を厳守せよ（私学の特別事情を加味して増員することは私学における教育・研究に何をもたらすか）
- ニ、体育選手の後援入学を改めよ。
- ホ、ガイダンス、オリエンテーションについて抜本的改革を図れ。

4. 共同研究を促進するよう具体的対策を立てよ。
- イ、教員の研究不足
- ロ、大学におけるヒエラルキーの構築
- ニ、実験助手制度の抜本的解決
- ホ、教員のオフィスアワー制度の確立

5. 研究費について
- イ、文芸研究費の額をあげると共に、その用途を明記せよ。
- ロ、実験指導費（監・工）の用途を明確にし、学生への還元率をあげよ。

6. 大学の財政問題について
- イ、大学の経営については素人の寄り集まりではなく、専門家の知識と技術を採用すべきである。
- ロ、受取料収入についての処理の合理化（教職員への山分けを改め、入学時の納入金について（入学手続後入学しなかった場合、授業料は返還すべきである）
- ニ、体育会関係の施設・設備について（一般学生に比し、体育会の学生諸君はあらゆる面で過分に利益を得ている。寮・補講……）
- ホ、授業料を物価指数でデフレイトすることが考えられないか。

7. 事務・機構・手続・管理の合理化

- イ、事務業務の機械化をはかれ。
- ロ、人事政策の刷新（俸給採用の廃止）
- ハ、事務職員の手当の削減
- ニ、財産管理の徹底

先述したように、この項目の大半は学生自治会が文書で提出し、大学は経営基本問題委員会・教育基本問題委員会を設けて、提出された問題も含めて討論しはじめた。その結果が現状であり、ロクアアトである。私は斯様な議論を歓迎しつつ今回の闘争のなかで、ワカアトであった。三年前までは、学園闘争と政治闘争を概念的に区別し、権の別を捉えていた。学園闘争から政治闘争へ、という発想がそれである。しかしながら、「一九六八年初頭からの大学闘争はあくまで政治闘争の性格を帯びており、学園闘争を政治闘争へ」という展開は空論に等しかった。外在的状况が断絶してしまっているが、と東大にあっては他大の闘争の助勢の域を出なかった。それが、突然四月二十一日（土曜日）午後、本校学園闘争委員会が行っていた大の清い学生を巡って官憲が学生を乱入し、無差別弾劾した事によって、「東大闘争」に火が点けられた。私は緊急に召集された四月二十三日の全西教職員集会で、この事態の重大な対応の仕方も提言した。たとえそれが非常事態の中にあったとしても、この闘争は「学生部の完全」を個人的発言で口に出してはならない。「全学闘争を闘争する」連署生に答えている。これらの条件を前提に、私は、「学生・教職員全権委託集會」を開催するよう強調した。しかし、御前大に於いても、六〇年安保闘争の際と状況は異なっていた。六〇年には「メソソリ」と闘争できた全学集會が、「一部暴力学生」云々からはじまり、政治的緊張感をムキ出した。このとき、私はこの大学闘争の長期化を望むを得なかった。私の中心には、東大闘争の一月八日・一九日を境に激化されたものが起っていた。それは、この時期に争大に闘争が起らないと全く大学改革に乗り遅れ、最も遅れた大学にならざる、という意識であった。しかし、既述したように、四月二十三日を境に又も状況が変遷していった。既述した大学闘争においても、官憲が直接介入するに及んで、大学闘争は政治闘争の質を脱しているという認識である。学生会中核を中心として、闘争学生が起したスローモーションを見たとき、私は「一週二」闘争の明大校資料編士対応闘争の未だ終了していないことを見とった。学生会で決議されたスローモーションは、既に三年前の闘争において提出されたものであるばかりではなく、深く聞かれている大学闘争の中にあってもバツとしたものではなかった。自己否定、個の論議などが他方へ論じられていくとき、明大は他大の闘争（とりわけ日大・東大闘争）を平本としながら、「東大・日大闘争で切られた地平を乗り越えて」闘われねばならないという闘争をもっていた。しかし、このことは概念的には認識していても、どう実践するかという具体的な議論がなされていなかった。私は、この闘争にも委ねたが、大学闘争の根幹は深く、大学闘争は起るべくして起っているとも云った。と同時に、私自身「政を党指」をきめていた。その党指とは、後述まで約い直かつ隠れた存在としてではなく、表面に出た存在として闘わねばならないということであった。学闘を卒業すると同時に、何か大人になった様な気がして、隠れた存在としての域を出なかつた自分の行動は間違っていないことも承知している。隠れた存在であったが故に多くの誤解を生んでいたことも承知している。私は、今度は隠れた活動家の道を逃げなかつた。一人の活動家、研究学者としてのノンセクトラジカルの一員としてこの運動に己を委ねしめらるべく決意した。私のこの決意を強固にしたのははなから己の闘争力であり、日共・民青であり、形骸化した教員会並びに教授の精神構造であり、はたまた昨日まで読者としての見つけめていた加害者としての自己の証であった。と云えよう。学闘、学料の如何を問わず闘争のあるなしに拘わらず、教授自身が起っていることで、改善しなければならなかつた問題は山積していた。しかし、彼等はそれをやろうとはしなかつた。それは、彼等自身の業権をあげ、並外け以外に大学の存在価値を認

めないことを裏付けることに気がつかなかった。私自身、彼等の利害得失関係の中で、真面目にそのおぼろげにありつこうとしていたにすぎない己を発見し、そこから闘いへの参加がはじまったと見てよい。そしてこの闘いの間で、生きていく人間の脆れ合いを実感することができた。学生との間で、そして闘争助手との間で、学部卒業後九年間の間で、私は人間の喜怒哀楽をはじめて集積したと云っても過言ではないだろう。パリケードを築く闘争を築く闘争か、パリケードの外なる自己だったか、あるいは、ロクアアトされる闘争だったか、する闘争だったかということは、私自身の思想構築の上で決定的な意味をもっている。この経験は、まさに体でのみ実感できるものである。私自身、教授は、誰彼区別なく根拠的に不信感を抱いてしまった。この不信感はおよそ私達することにはできない。したがって、大学闘争を通じて到達した地平は、己れを一人の孤狼として国家権力と対決せしめるという位置にあり、これを一人の孤狼と対決せしめるという、激戦がどうの、という次元で私の頭は働かない。自ら気がつかない不可知論的認識論をふりまく自然科學者の姿を見てその人たちの科学そのものを驚かされるを得ない。勢がはめられた知性、争いのある民主主義・大人の世界：この争い、争い、大人の姿容もそ定まらねばならないマイルストーンなのである。自然はすべて争いによって明らかになるものであるし、知性や理性には持たない。その争い、多くの人は「体感」という。現体制が如何に強固でも、体制の隙内を破壊していくと云う。斯様な研究道かあるだろうか。私は、語々の現象の発生源が、資本主義と云うイデオロギイによってたらされていくと科学的論議が可能と考えるが故に、あつた矛盾を正視し得るために、社会主義という理論的武器を試みる必要があると考へるに至った。観念的にではなく、実践的に。

こと、今回の明大闘争から出た闘争と自己のやり取りを見て、自己の内部における闘争の認識、大衆闘争に対する認識も大きく変遷してきている。若しい家計をやりくりしている家賃の子供が勤めた学費が、こんな不真面目に、そして、一方的に使われていものだろうか。と考へたし、とてもじゃないが大学でなくとも人前で人に物を教える資格・能力などないと思われるものが教鞭をとっていることに憤りを覚えたものである。

しかし、今の私は斯様なものに対しては告げを告げする気持は毛頭ない。この闘争は「敵は誰か」を許さず続けられてきて、一つの結論を得るに到った。思想的には「資本主義批判」、実践的には「一紙記者」として自らを突き進めよう以外に道はないと思っている。しかし、体制を否定せんとするために自ら実践している自己は、反面体制の内において日常性を維持している以上、私の激戦者としての実践も概念的な思想運動としてではなく、実践的な行動を伴わねば無意味である。

私自身、建築学の領域にあって、少なからず体制批判者として物も書き、話もしてきたと自負してきた。しかし、そのこと自体が資本主義体制における補完的役割を果たしてきたことを認識し認めざるを得ない。人を告発することは易しい。人を批判し自らを批判することは易しい。しかし、この批判され、批判する行為を持続することは易くは無く、行ない難いことを私自身考へていく。

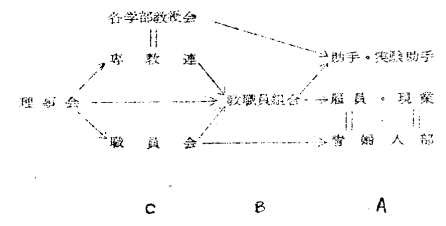
借り物になるが、「アリアカに仕掛原住民」は彼等の日常生活を通して使用しているツールは二、四千萬であり、その一つ一つがどのように自己の生活と結びついているかを認識しているという。換言すれば、一つ一つの道具と自らを社会性において捉えることが可能であるという。しかし、われわれの生活を導いて使われているツールは恐らくは三、四億と云う一（億にもなるのではないかと云われる）だが、その一つ一つがわれわれの生活とどこでどのようにつながっているかを知ることが不可能になってきているといわねばならない。とくに、資本主義社会において、遊馬馬のように先しか見え、自らの行為が社会性において如何なる意味をもっているのかということが見え失いがちなのである。換言すれば「専門馬鹿」というのがそのことを表現しているとも云えよう。そして、このことを断絶とする限り、めいめい

が裏面にやれば、それで良いのだという結論が出てきてしまふ。果してそうだろうか。めいめいが真面目にやって、普通の人間へ人間を解放するために、個から全体への論議と、総合作業の目的が鋭く問われねばならない。それは極めてイデオロギーの問題と化するのである。私たちが、自らの日常性の中で、自分とコンピューターの関係を問いつめたことがあろうか。コンピューター時代に突入しているが、この代物を自らの生活と結びつけることさえできない。アホロケなほどか、ルナー衛星はどうか。宇宙船と自己のかかわりはどうか。人々の驚きは、誰もやることがなかったものがやられたという単なる技術的冒険の成果に感嘆してはいるにすぎない。われわれは、多くのツールを所有すればするほど、ツールとわれわれの間が明確に認識されねばならない理由は、生産手段の私的所有に強固化が進めば進むほど、われわれは社会からの除外を受けることになりかねない。私は、この関争の過程で、全く類似した概念論としての不可知論の無意味的展開をする科学部のみを語り、農学部のみを語り、法学部のみしか語り得ない大学教授が余りにも沢山いた。この大学教授の意識、思想はとりもたず、その研究の統一的科学性、深遠性の欠落を表明しているものといえる。全体像が把握できず、どうして部分改良の方向性が導き出せるのだろうか。ここで、若しできる部分的改良があるとすれば、その実践主体が生きて、その時代の体制内改革でしかない決して本質的進歩止揚の普遍的価値の創造を意図したものでないといわねばならない。たとえそれがこの明大の問題であつたとしても、部会制のように(50)人以上の集会は事実上官僚の方向に責任が持たないからやめて欲しい、といっていることを覚えておかなければならない(一月土曜夜談)、個別明大において自主運動できるのは現在の資本主義体制によって規定されているのである。したがって、農学部・工学部・法部の如何を問わず、個から全体への意思決定のメカニズムが確立されていないこの状況にあって、徒らに、学部単位・科単位内の改革を強硬することは、体制内補完物としての合理化をもたらす以外の何物でもないことを知らねばならない。

私は冒頭で、三年前の選挙闘争が明大では未だ終わっていない、といった。それは、各学部・学科のみならず、大学全体として何一つ基本的な事項が解決していないからである。この未解決の原因をどこに求めるべきか、その人の思想性が問われると、私は思う。私はこの第一の原因を、大学を構成する大学人(私も含む)としてみれば、教授のやる気のなさ(これこそ現在の大学教授の社会的存在を反映したものである)に求めねばならない。このやる気のなさこそ現在のわれわれの存在基盤である資本主義体制にあるといわねばならない。社会を一つの会社に例えてみると、教授なる存在は、さしつめ労働者組織長といったところだろう。被訓練者に対しては絶對的指導者として存在しつつも、議長として社長の方針に従って自らの業務領域が規定されているのである。根拠法には資本主義社会では利潤の最大限確保が最優先の観念を媒介しつつ展開される以上、議長がどのような強制的訓練法を考案しようとも、それは資本主義体制における個別資本の利益の範囲内においてのみ採用されるのである。学期そのものが現在の体制における訓練法・訓練法にほかならないことを知らねばならない。大学のみが学問の自由を体制から与えられる苦はなく、若しこの自由が関いられれば学問の破壊を意味するならば、資本主義思想を否定し、現体制を否定する闘いを通してのみそれが可能だということ、少なくとも明大の三年前の闘争から一九六九年十一月現在までの闘争を経験した者なら分かっている筈だと私は考えている。私はこの闘争を経験したことを、誰よりも幸運だと思ひ、バリエーションを守りロケットされた立場で笑ひたいことを喜びたい。

我が教職員組合は何の志向性・運動性も持っていない。その実例を述べてみる。私が教職員組合に入ったのは八年前でユニオンショップ的なので組合費を取られた時より始まる。その時、委員長はだれか知らず運動方針を何をするのかわからない。結果として本人に通知せず徴収している。学部より執行委員が出たければ全くコンボサジヤでないようなものだ。ただ知らされたのはベニスタブ闘争をやるから徴収するのを下さ、是非大代表員組合に出陣して下さい、と云い、どうも二・三枚ある程度、そこで拡大代表員組合に出陣してみようといふ事に青婦人部、現業員、奨励員等下部階層の人々の顔がチラホラその人達でまあまあ組合運動と言ふものに力を入れず担当をもちろが時間的暇つぶしに來ている程度でいい事だ。若し若しは要はなしと言つた程度、実際に闘争をするのは下部階層が直進的となり上部階層の人達は下部階層の人々に甘えて、特に教授層。審判層は典型的な例である。

ではここで現在進行されている組合の位置づけを图示してみよう、



ここで組合はA部にあるのが望ましいのだがB部に位置しC部の所は組合の決定を振返される所を指す意見を出してもあまり取り上げられずこのように一方通行の決定である。このC部は闘争中における顕微鏡をえらぶ又何かの僅し微の時にも組合の手足として働かされるがものである。だから職員・現業・奨励員あたりから執行委員が出ても何の役にもならない。闘争結果は上部(専任教員・職員)の圧力により決定している事が多い訳である。

本来の組合はB部の所で行われなければならない。

